# 古典教育の意義に関する一考察

浅　田　孝　紀

## はじめに

古典教育の意義については、これまで様々に論じられてきた。それに対し、古典教育無用論ないし否定論も常に存在する。そして両者とも決定的な説得力を持たぬまま、いわば平行線の状態で今日に至っている。小稿ではそのような状況の分析を通して、古典教育の意義を考える際の観点の捉え直しを図ることを試みる。但し古典教育無用論ないし否定論は、論文等の形で公にされることは非常に少ない。そこで、ここでは主に従来の古典教育意義論（肯定論、推進論）の特徴の整理と批判的検討を行い、その問題点を探ることを通して、改めて古典教育の意義を考究していくことにする。

## 1　古典教育批判

上述の如く論文等の形での正面切った古典教育無用論は、少なくとも昭和30年代以降は非常に少ないのだが、古典教育の存廃をめぐる議論のあり方としては、古い新聞記事ではあるが、次の資料がその典型的なパターンを示している。昭和40年４月の『読売新聞〈大阪〉』「気流」欄における「漢文教育廃止論争」である。実際には「古文」も含めて議論されているので「古典教育廃止論争」と言い換えてよいものである。まず奈良市の伊原肇与氏が次のような投稿をした。[1)]

> ……おそらく世の中に出て、一般の者は古文または漢文を使用する機会はほとんどない。……日本古代文化の知識が教育上必要ならば、国文学者が古文を現代文に書きかえれば、一層よく理解できて能率的でもあろう。あたら青年男女のエネルギーを不必要な勉学に費やすにはあたらない。……この意味でも私は高校における古文・漢文の科目廃止を提唱するものである。……

これに対して反対論が寄せられる。[2)]まず大阪市の福光馨氏が

> ……高校の漢文や古文は卒業後、あまり使用の機会を持たないとのことだが、それなら、たとえば高校の数学における因数分解や微分、積分といったものはどうか。
> ……漢文にしろ積分にしろ、社会に出て必要だから習うのではなくて、一般的な教養として習うものであると思うがどうでしょうか。

と反論し、また池田市の森山康浩氏も、

> ……世の中に出て実際の役に立つものとは一体何でしょう。そういう科目ばかり追

うことでよいのでしょうか。すぐ必要な科目だけ習うというのでは、余りにも無味乾燥な教育だと思います。……現代はただでもインスタント時代で、加工されたものしか使わない風潮に満ちているとき、じっくりと原文と取り組む精神を養うことは、教育の大きな課題ではないでしょうか。温故知新は今こそ、ぜひ必要だと思うものです。……

と述べた。

さらにこれらの意見に対する賛否両論が提出される。[3)]まず廃止賛成論を挙げると、西宮市の浜野祐二氏が、

……いまどき通用しない言葉や文字を丸暗記するにはムダが多すぎる。……高校生の学習エネルギーをもっと大切な科目に向けるようにすべきだ。

と述べている。一方廃止反対論としては、高知市の高橋清子氏が、

……全ての人間が大学教育を受けられないのだから、せめて高校時代だけでも古文、漢文をうけさせたいとおもうのが親心である。現在の日本語は古文、漢文と切り離して考えられないからです。……国文学者が古文を現代文に書きかえれば能率的であるかも知れないがこれでは古文、古語の持つ語感とか、音韻などの味わいは半減されてしまう。

などと述べている。

これらは一般の方々が自由な立場で投稿したものであるが、それをあえて紹介したのは、専門の国語教育の研究会等の場においても古典教育の是非が話題になると、これと大同小異の議論が行われることが多いからである。そしてこのような状態のまま、議論は平行線になっていくのが常である。

では、なぜこのような両極端な議論が起こってしまうのか。それは、おそらく古典教育意義論自体の弱さに大きな原因があると思われる。

そもそも歴史的には、普通教育の中で「古典」が扱われることになったいきさつが非常に曖昧である。このことに関し、益田勝実氏は次のように述べている。

漢文に国文が置き換えられたのは、まだ、母国語としての現代日本語を、言語教育として課する必要が痛感されていなかった歴史的状況下、文語と口語が別々に存在し、文語文に馴れることの方を〈教育〉と考えた時代の、できごとだった。寺子屋の実用文語文の言語教育を、藩学の漢文に置き換える英断はむつかしく、といって、国学の〈みくにぶり〉の擬古文の教育の必須は考えにくいところで、近代の文語文の語学教育と教養としての国文の古典の合体が進行していった。文語文の語学教育が崩壊しても、上部構造としての国文の古典は、なんとなく残った。人文主義の教養思想が支えとなったからである。

「なんとなく残った」というわけである。そして氏はこのあと次のようにも述べている。

……国語教育が言語と教養の間をさまよってきた、長い歴史があって、古典撲滅など大それたことはしにくい。古典教育の範囲をせばめたり、せばめたものをまた少

し増強したり、揺れに揺れて、確たる理論づけもないままに、温存されているのが実際であろう。[4)]

こういう状況で今日まで来たから、古典教育には積極的な意義が見出しにくいということになるのは当然でもある。「古典」の教育上の積極的な理由が欠如している状況についての中村格氏の見解を挙げてみる。

氏はまず「学習指導要領」における古典教育の目標等の説明について、「その抽象的かつ観念的な表現は説得性に欠け」ているとし、「教師の方もまた、……与えられた時間に与えられた教材を……昔ながらの訓詁注釈万能主義の方法で、ともかくも教えてきているというのがいつわらざる大勢ではあるまいか。」と述べた上で、「つまり、公教育の一端を古典によらねばならぬ積極的な理由が、生徒にはもちろん、教師の側にも十分納得されぬまま惰性的にそれは継続されてきているのである。」と纏めている。[5)]

こうした状況から、先のような平行線的な議論が生まれてくる。長尾高明氏は、古典教育をめぐる両極端な議論や分析と、そうした議論を導いている現状への批判を、次のように提示している。やや長いが、抄出・引用する。

……国語科教育を専門にしている学者の多くは、もっぱら義務教育課程のみにその守備範囲を限り、古典を敬遠しているかにさえ見受けられる。……国語学・国文学を専門とする学者は、一部の人を除いて教育に対しては概して冷淡であり、研究成果を教育に生かすための努力をあまりしない。……教育現場の実践報告の中には……「専門的になりすぎて生徒の実態に合わない」との理由で冷遇されることも多いのが実情ではあるまいか。これでは、一部の古典教育排斥論者の批判（その多くは実用学に偏した極論が目立つのだが）に対して明確な反論をすることもできず、古典軽視の傾向が助長されていくのを座視するのみということになりはしないだろうか。……また、生徒の実態や古典授業の実情という問題になると、もう既に古くから絶望的状況が繰り返し報告されている。……ところがこれら多くの悲観的実態報告のほとんどが、生徒へのアンケート等に基づいた資料であることを考えねばなるまい。……しかも、これらの実態と称する否定的見解が、すべて現代との短絡的結合を求める意識に根ざしている点を見逃すわけにはいかない。効率優先・実用学優先の風潮が教育をむしばんでいることの象徴的現象であると言えよう。

そして古典教育「否定論」と「礼賛論」」について、次のように整理している。

ア　否　定　論

・古典の内容は古くさく、現代の生徒の興味を引くに足りない。（言語的抵抗が大きく生徒には苦痛である）

・現代に役立つものが少ない。（生徒の日常とは無縁な世界である）

・文化の享受は現代語の範囲で可能である。（原典に親しまなくても伝統文化は享受できる）

イ　礼　賛　論

・古典こそ文化の源泉である。

・古典は不易なる価値を持っており、現代でも新鮮である。

・伝統文化を継承するのは民族の義務である。

……右に紹介したのは無論両極といえる形のものだが、実用とか現状とかに重きを置きすぎる否定論と、精神論的、あるいは観念論的な礼賛論とは、いずれもあまり感心できない。[6)]

これらの先行文献によるならば、古典教育無用論が生まれてくる原因の一つは、古典教育を行う積極的な理由が、意義論を唱える側にも納得できないままに、無理にでもその意義を唱えようとするところにあるということになるであろう。古典教育意義論そのものが、大きな弱点を抱えていることになるのである。そこで、意義論自体の内包する問題点を探る必要が生じてくる。

## 2　従来の古典教育意義論の４つの特徴

本節では従来の古典教育意義論の特徴を、昭和30年代以降の主なものを中心に分類整理して示すことにする。昭和30年代以降に限ったのは、それ以前の状況が戦前戦中の教育との関連でかなり特殊なものであったことによる。また、現行の学校教育制度や学習指導要領を前提にしているものは、一部を除きここでは除外し、論者個人の見解が現れているものを中心に見ていくことにする。

さて、従来の古典教育意義論は、大きく分けて次の４つに分類できる。なお、これらは一人の論者が１つの見解のみを述べているとは限らない。１つだけの場合もあれば、４つ全てを述べている場合もある。

①人格形成、民族性の育成、態度の育成等の、「陶冶」（「訓育」に対する）を掲げるもの。[7)]

②文化遺産の理解や知識等を強調し、あるいはその享受や継承を掲げるもの。[8)]

③言語能力の育成に資するとするもの。[9)]

④現代に反映させることを唱えるもの。[10)]

このそれぞれについて、代表的な見解をいくつか挙げてみる。紙幅の都合で全てを紹介できないことをあらかじめお断りしておきたい。

まず①では、時枝誠記氏の見解が、その代表的なものとして挙げられよう。

……私がここで提案したいことは、古典を以て、民族の姿と見る古典観であり、古典教育を以て、民族が自分自身の姿を見る方法を教へることであるとする古典教育観である。……古典は、今日の自己が、いかにして形成されたかを明かにするに必要なものとして教育されねばならないのである。古典を読むことは、民族が、自己の過去を知り、また反省するといふ意味において重要なのである。[11)]

氏はこれに続けて、この立場は「感化主義」の立場ではないとの言をつけ加えているが、しかし「惚れさせない国語教育」を唱えた氏にあっては、感化主義とまではいかなくとも、多分に精神主義的ではある。とはいえ、この言説自体は穏当なものといえよう。

もう一つ、石井茂氏の言を挙げておく。

現代は……うるおいの乏しい不毛な社会と化しつつある。それを救う教育の場での大きな役割を担うものが、古典による情操教育であると重ねて提言してやまない。[12)]

氏は日本古典に大きな比率を占める自然への愛が軽視される現代にあっては「古典による情操教育」が不可欠だと言う。その適否はともかく、はっきりと「情操教育」を志向している点は理解できる。

次に②の例として、まず西尾実氏の見解を掲げる。

……現在の教育では……反動としての古典主義ではなく、近代文化発展の根拠になっている古典のエネルギーを享受し、来たるべき文化創造の資源としての古典のエネルギーを発掘するための古典教育の必要を自覚してきている。……高等学校や大学の一般教育において、古典を学習させなくてはならないのは、現代国語における言語生活・言語文化の未熟や不備を充実させ、完成させるためのエネルギーを古典から吸収しなくてはならないからである。[13)]

「古典のエネルギー」なるものが如何なるものであるのかがやや不明確ではあるが、古典を享受することの重要性を述べていることは明確である。この見解は④にも分類できるが、文化遺産の享受を重視している点で②の代表的な見解とも言える。

次に、石川忠久氏の文章から引用する。これは学習指導要領の解説書に書かれたものであるので、石川氏個人の見解と言うよりは文部省の見解と言った方が適切であろう。平成元年改訂の高等学校学習指導要領において、改訂の基本方針の一つになった「国際化への対応」に関する記述である。

……国際理解を深め国際協調の精神を養うためには、他国の文化を理解し国際感覚を身に付けなければならない。他国の文化を理解するには、自国の文化・伝統への理解が不可欠である。……新しい時代を迎え、日本の国際化への対応の一つとして、古典の重視が問い直されたのである。[14)]

内容の当否は別にしても、この見解はまさに文化遺産に対する理解・享受を重視するものであり、②の典型的なものの一つと言ってよいであろう。

③の例に移る。まず増淵恒吉氏の見解である。氏は4つの全てに言及しているのだが、ここでは③の見解の一つとして提示する。

国語科における言語感覚の錬磨、人間性の育成に、特に参与するものは、文学及び古典の学習であろう。いずれも、ことばの理解力をもねらわなければならぬ領域であるにしても、それらの学習は、ことばの感覚を鋭くし、人間形成を図ることに、より多く傾斜したものである。……言葉に対する感受性を鋭敏にし、美的体験を豊かにするとともに、社会の事象についての認識を深め、人間として生きる意義を考える。……漢文学習は……漢字・漢語について正確な知識を得たり、論理的な文章構成法を学んだりして、言語生活に役立てること、読解・鑑賞を通して、心情を豊かにし、思考力・批判力を養い、かつ、先哲の人生に処する態度を学ぶこと……等

に、漢文学習の意義が認められる。……古典の学習は、文化遺産を継承し享受するとともに、新しい文化を開発し創造していくための基礎的な能力を伸ばし態度を養う学習である。[15]

氏は「言語感覚」について触れている。これについては小稿でも後に言及するが、それも含めて「基礎的な能力を延ばし態度を養う」ことを重視したのが増淵氏の見解であると言える。

次に、かなりラジカルな意見を紹介しておく。作家の杉森久英氏のものである。

古典が邪魔物あつかいされたのは、それが古い社会体制につながるとか、変革の求める時代の感情にそぐわないとかいうことだったろうが、私はやはり、日本語の文章の根幹をなすものとして、十分叩き込んでおくべきものだろうと思う。……われわれが日常使っている言葉や言い回し、修辞、慣用句のいかに多くが――いやその大部分が、それぞれ古典に源を発していることを考えると、もっともっと古典の教育を充実すべきであろう。古典が現代と無関係のように思ったり、進歩を阻害するもののように思ったりするのは、それ自身、文化の伝統についての無知と、思想内容の浅薄さを白状するものに過ぎない。[16]

作家・評論家としての自由な立場であるため、「十分叩き込んでおくべき」「文化の伝統についての無知と、思想内容の浅薄さを白状するものに過ぎない」など、かなり過激であるが、当時の国語教育界に一石を投じた文章として看過できぬものである。②にも関わるものではあるが、能力重視の立場が充分に窺えるものであるといえよう。

最後に④の例である。まず江野沢淑子氏の文章から引用する。これは氏が出席した会で出た「古典の必要性」に関する意見の中で、氏が最も「惹かれた」というものである。

古典の中には、惹かれる点と反撥する点がある。現在、忘れられている生き方やものの見方がある。そういうものを確めて、現代の生活をより豊かにするために必要。[17]

明らかに現在の生活に活かすという観点からのものであると言えるだろう。

さらに、安良岡康作氏の見解は次の通りである。

……古典的作品が、文芸教育において、何故に、積極的に取り上げられ、学習されなくてはならないか。……結論的に言えば、古典文芸作品が、現代の人間にとって、大なる教養的意義を有するのは、そういう古典の中にのみ存する価値が、現代のわれわれを導き、向上させる力を持っているからである。[18]

「導き、向上させる力」というわけで、先の西尾氏の「エネルギー」と同様の見解である。いずれにしても、現代に反映させるという立場であることは明白といえるだろう。

以上、従来の古典教育意義論の特徴に関する具体例を掲げた。逆に言えば、これらの先行研究文献から抽出したのが、先の4つの特徴ということになる。

### 3　反論のあり方とその止揚

ところが、これらに対しては、いちいち反論が可能である。①については、「態度主義的だ」「ナショナズムを強調する危険がある」等。②については「教養主義的だ」「古典を読まなくても可能だ」等。③については「能力主義的だ」「生徒の負担を増すことになる」等。④については「現代には活かしきれない」「現代との異質性こそ重要だ」等である。そしてこれらは上の4つの特徴に対して平行線的に対立している。

すなわち、論者の価値観の違い、特に教育観（就中、国語教育観や学校教育観）や古典観の違いに基づく様々な反論が存在し、加えて「古典教育」を「文学教育（あるいは文芸教育）」と見るか否かなどが絡んで、複雑になっているのが古典教育意義論をめぐる現状だということになる。いずれにしても反論が起こり、それが平行線になってしまっているわけだが、古典教育意義論にしろ無用論にしろ、その議論が論者の価値観の違いに基づくものである以上、平行線になるのは自然の成りゆきであるとも言える。

ただしここには相対的価値を絶対的価値にすり替えてしまう傾向が見られる。例えば「能力」にしろ「教養」にしろ、ある程度はあった方が望ましいものであるはずだが、「能力」とか「教養」などの言葉を出すや否や、「能力主義だ」「教養主義だ」という批判が出てくることになる。すなわち、本来は程度に応じて相対的にその価値を認めるべきであるはずのものが、絶対的なものとして標榜されたり、批判についても「主義」という言葉をつけることによって悪い意味を帯びせられ、絶対的に否定されてしまうという状況があるのである。これは単純な価値観の違いなどではなく、論じ方の姿勢に関わる問題であるともいえる。

ともあれ、議論が平行線になりがちである以上、この状態を止揚するためには平行線の議論を生む原因になるものを除いて考えなければならない。そこで根本に立ち返り、現在の制度・習慣や、価値観の違いが現れやすい要因を、可能な限り排除して考え直す必要が生じてくるのである。すなわち、「現在の学校教育制度に関わりなく、我々が古典を学ぶとどのようなことが起こるか」ということを考えることになるのである。

さて、現象面のみを考えるならば、「古典教育」は究極的には「古文（いわゆる文語文）を読むことの指導」である。ただしこれは無条件のまま提示すると誤解を生む恐れがあるので、3点ほど条件を加えておきたい。

まず国語教育上の問題なので、「古典」は「言語作品」に一応限定する。そして、ごく常識的に考える限り、その「言語作品」のほとんどが文語の作品になるはずである。

第2に、現代語訳や翻案教材を用いるか否かは方法論上の問題であり、本質論ではない。原文を一切用いないのであれば、形式的には「現代文を読むことの指導」と変わりがなく、「古典教育」は、「古典」に伴う価値だけがその中心的関心事となってしまい、価値観を可能な限り排除するというここでの趣旨に合わなくなる。

第3に、「漢文教育」を「外国語教育」と同一視する意見が時折出てくるが、「漢文」は作品の内容や成立事情を別にすれば、「漢文体」という日本語の文語文体であり、中

国語で読むのでない限り「外国語」ではない。その意味で、漢文は古文の一種である。従っていわゆる「漢文教育」も「古典教育」に含めてよい。

### 4　文語文を読むことの言語教育的意義

「古典教育」が究極的には「文語文を読むことの指導」であるならば、「古典教育の意義」についても、つまるところ「文語文を読むことの意義」を考えることになる。先程から価値観の違いが現れやすい要因を可能な限り排除して考えているので、ここでも「古典」に伴われる価値（特に教材となる作品の内容的価値や文学史的価値）は一応除外し、まずは言語教育の場で文語文を用いるということ自体の意義を考えてみる。

さて、古典教育の場でもいわゆる「読解力」が問題になることがある。「読解力」という場合、そこには様々な要素が絡んでおり、単純には述べられないのであるが、今仮に「読解力」を「文章を読みこなす力」という程度に大きく捉えておくと、そういう力をつけることの是非は別にして、その「読解力」がどの程度つくかは教育方法に大きく左右されることである。だが、文語文を教材として用いる以上、教育方法の如何に関わらず、何らかの形で行わなければならないことがある。それは、文語文と口語文との対照である。相当に学習が進んでいる等の理由で口語文と対照する必要がない場合を除き、文章や口頭で教師が示すなり、学習者が調べるなりといった、何らかの形での口語文との対照が必要なのは言うまでもなかろう。そしてその対照をすることを通して、学習者に文語的表現に関する「言語感覚」が育成されることだけは、最低限の意義として期待できるはずである。

このこと自体は特に新しい見解ではない。「古典教育」によって「言語感覚」が育成されるとは、既にいくつもの先行文献の中で言われていることであるし、「学習指導要領」などでも打ち出されていることである。

ところが、従来の論には「なぜ古典教育によって言語感覚が磨かれるか」ということに関する言及がないという欠点があった。それは、論者による「言語感覚」の捉え方が示されないということに起因する。すなわち、「言語感覚」という用語を「言葉についてのセンス」という程度に漠然と捉え、明確に概念規定をしたり厳密に性格把握をするということなしに、「古典教育」と「言語感覚」との関係が言われてきたわけである。しかしそれではこの両者の関係は曖昧なままである。

筆者は先に「言語感覚」の概念に関する検討を行った。それは、「言語感覚」の概念を厳密に規定し尽くすものではなかったが、しかし「言語感覚」と呼ばれるものの重大な一局面に関する規定を試みたものであった。それは次の通りである。

> 言語主体が言語を表現乃至理解する際、表現乃至理解される個別的な言表と、その言語主体が属する集団における通常の社会言語体系との間の差異や、個別的な言表相互の差異を、認識乃至感得する能力。[19]

「文語文」はここでいう「表現乃至理解される個別的な言表」であり、「口語文」は「言語主体が属する集団における通常の社会言語体系」に当たると考えてよい。そして

その両者の「差異」を「認識乃至感得する能力」が、文語的表現に関する「言語感覚」になるわけである。

では、そのような言語感覚を育成することにどのような意味があるか。文語に関する言語感覚が育成されれば、例えば古典や歴史などに関わる書物や、あるいは歌舞伎や能楽のような伝統芸能等の、文語的表現を伴う言語文化に親しむ糸口が開かれるはずである。すなわち広範な言語文化への接近をより容易なものにする効果があるわけである。文語に関する言語感覚が全く育成されていなければ、そのようなものに親しむ契機さえも激減することになるであろう。逆に、そうした言語感覚が育成されていることによって様々な言語文化に親しむことが出来るなら、それによって言語生活が充実していくことにもつながるのである。

これらは意義として認められて良いし、悪い意味での「能力主義」や「文化主義」ではないと言えよう。古典教育の最低限の意義は、直接的には言語感覚の育成に大きく寄与するということ、そして副次的には広範な言語文化への接近を容易にするということになる。そしてそれは先の言語感覚の一局面の規定によって支持されるのである。他の意義を考えていく場合でも、常にこの最低限の意義の上に立って考察するべきであろう。

## おわりに

小稿では筆者個人の立場を極力排除した。端的に言えば筆者は「古典教育」の大部分を「言語文化教育」として位置づけるべきだと考えており、上記以外の意義も認めているのであるが、短く述べてしまうと誤解を招くので、詳しくは別稿に譲る。いずれにしても古典教育の存在理由を問題にする場合は、まず上記の意義の確認から始めるべきであると考える。この点を無視した古典教育無用論は、古典の教材化の可能性を全否定してかかる不毛な極論になってしまうであろう。

注 1) 昭和40年4月9日「高校の漢文廃止を提唱」
2) 昭和40年4月14日「漢文廃止に反対する」
3) 昭和40年4月26日「漢文廃止論をめぐって」
4) 「古典教育とよばれるもの」『文学』49巻10号、1981・10
5) 「古典教育と国文学――その主体性喪失の状況をめぐって――」『言語と文芸』81号、1975・10
6) 長尾高明『古典指導の方法』1990、有精堂、pp. 4 ～ 9
7) 時枝誠記『改稿国語教育の方法』(新装版、1987、有精堂、pp.170～171。原版、1970)・長谷川孝士『豊かな国語教室――原理・方法の探求――』(1977、右文書院) p.220・増淵恒吉「高等学校における古典指導の意義」(大矢武師・瀬戸仁編『高等学校における古典指導の理論と実践』1979、明治書院)・斉藤義光『高校国語教育の理論と実践』(1979、教育出版センター) p.14・小林國雄『高等学校国語科教育の実践』(1981、大修館書店) p.82・植垣節也「古典教育の意義」(『言語表現研究』2、1984・2)・石井茂『国文学・研究と教育』(1987、風間書房) p.378 等
8) 西尾実「古典教育の意義」(『国文学』1961年1月臨時増刊号)・江野沢淑子「古典の必要性について」(『解釈』15巻2号、1969・2)・杉森久英「国語教育のイロハ」(『文芸春秋』1975年4月号)・増淵恒吉注7前掲論文・斉藤義光注7前掲書・植垣節也注7前掲論文・石川忠久「古典重視の

国語教育」 北川茂治・市原菊雄編『改訂高等学校学習指導要領の展開国語科編』1990、明治図書）等。

9) 杉森久英注8前掲論文・増淵恒吉注7前掲論文・斉藤義光注7前掲書・小林國雄注7前掲書・植垣節也注7前掲論文 等。

10) 西尾実注8前掲論文・江野沢淑子注8前掲論文・安良岡康作「古典指導の意義と方法」（『中学校国語科教育講座第二巻 読むことの指導Ⅰ』所収、1972、有精堂）・増淵恒吉注7前掲論文 等。

11) 時枝誠記『改稿国語教育の方法』新装版、1987、有精堂、pp.170～171。原版、1970

12) 石井茂『国文学・研究と教育』、1987、風間書房、p.378

13) 西尾実「古典教育の意義」『国文学』1961年1月臨時増刊号

14) 石川忠久「古典重視の国語教育」北川茂治・市原菊雄編『改訂高等学校学習指導要領の展開国語科編』1990、明治図書

15) 増淵恒吉「高等学校における古典指導の意義」大矢武師・瀬戸仁編『高等学校における古典指導の理論と実践』1979、明治書院

16) 杉森久英「国語教育のイロハ」『文芸春秋』1975年4月号

17) 江野沢淑子「古典の必要性について」『解釈』15巻2号、1969・2

18) 安良岡康作「古典指導の意義と方法」『中学校国語科教育講座第二巻 読むことの指導Ⅰ』所収、1972、有精堂

19) 拙稿「『言語感覚』の概念に関する一考察」『人文科教育研究』19号、1992

（筑波大学大学院 教育学研究科 人文科教育学）